JAWHM
広報新聞
10月10日
水曜日
発行所
一般社団法人
日本ワーキング・ホリデー協会
東京　：03－6304－5858
大阪　：06－6346－3774
名古屋：052－462－1585
福岡　：092－739－0707
号外

40周年ロゴ決まる

ロゴのテーマは多様性と相互性

最優秀賞はプロデザイナーの手に

一般社団法人　日本ワーキング・ホリデー協会（以下、ワーホリ協会）広報担当の真田氏は、令和元年7月より企画を進めていたワーキングホリデー40周年ロゴデザインが決定したことを発表した。このロゴをデザインしたのは岩手県在住の髙橋 晃氏（62歳）。デザイン事務所に勤務するプロのデザイナーだ。

髙橋氏は自身のデザインを次のように解説する。「矢印は日本から世界に飛び立つ人と、外国から日本に来る人を表しています。また、地球上のカラフルな色合いで世界の国と多様性を表現しました。」

国内外から248作品もの応募があり、企画部では改めてワーキングホリデーの注目度の高さを実感した。（最年少応募者は15歳、アイルランドからの応募もあった。）

最優秀賞の選定は、ワーホリ協会カウンセラー一同の協力の元行われた。優秀なデザインが多く集まったため選考は難航したが、ワーキングホリデーにおける「相互関係」に焦点を当てたことが高く評価され、高橋氏のデザインが選ばれることとなった。

今後ワーホリ協会では、ワーキングホリデー40周年を国内外に幅広くPRしていくためのシンボルとして、今回のロゴを各所で使用していく予定だ。

真田氏による作品の解説

この作品が選ばれた理由

1 ワーキングホリデー協定の本質に焦点を当てている

多くの作品が「日本から世界へ」というテーマで作られていた中、この作品はワーホリ協定の本質である「相互協定」の部分に焦点を当てている。インバウンド対策も今後の重要なファクターであるため、マッチしている。

2 多くの色が使われており カラフルでかわいい

カラフルで可愛らしいデザインは目を引き付ける。また、使われている色は「多様性」の象徴であると同時に、各国のイメージカラーでもある。それらが集まって形を成しているのは、実に「ワーホリ的である」と言えるだろう。

3 シンプルで、いろいろと展開しやすいデザイン

ロゴマークには今後の展開を考えた汎用性も求められる。この作品はワーホリ協会のロゴと並べても遜色がなく、かつシンプルなデザインのため極端な拡大・縮小にも耐えることができるので「どこでも使える」のだ。

4 ワーホリのこれから 末広がりを連想させる

2020年にワーキングホリデーは40周年を迎えるが、それで終わりではない。ここから50周年、100周年に向けて我々の活動は続く。2つの矢印が「広がっていく」イメージは、ワーホリの今後の広がりを連想させる。

ロゴ選考は最後まで難航

「100件くらいの応募があるといいなぁ…」という企画当初の真田氏の予想は大きく外れ、最終的には国内外から248点もの応募が集まった「ワーキングホリデー40周年記念ロゴ公募コンペ」。応募作品も個性的なものが多かったが、応募者の個性も幅広かった。

一番最初に驚いたのは、公募をスタートして間もなく72歳のおじいちゃんから応募があったことだ。ニュースリリースを配信したとはいえ、まだメディア露出も低かった時期にデザインを作成して応募まで行う行動力の高さに感服した。（図1）

一方で、最年少の応募者は15歳の少女であった。「世界で活躍するグローバル人材を、飛び立つ・はばたいているイメージで表現した」というデザインの解説からは、若い世代にもワーキングホリデーという制度が浸透していることが実感できる。（図2）

日本国外から応募があったのもうれしい誤算だった。アイルランド在住の24歳の女性は、「ワーキングホリデー利用者は日本代表であり、文化を共有し、世界中で関係を築く」ことを、海外から見た日本人を的確に表現している名刺を使った面白いデザインに落とし込んでいた。（図3）

プロのデザイナーからも多くの応募があった。中には別のデザインコンペで入賞したことがある方の応募もあり、やはり一線を画したクオリティと存在感を放っていた。（図4・図5）

最終的には広報部の真田氏が候補を10まで絞り、そこからカウンセラー一同のご意見を参考にしながら最優秀作品を選択することとなった。最終選考まで残った作品の中で特にカウンセラーからの評価が高かったのがNo.211。（図6）ワーホリという体験の縮図としてデザインされた本作は、これから海外へ飛び立つことへの「ワクワク感」が一目で伝わってくる素晴らしいデザインだった。しかし、今回はこの「細かさ」が明暗を分けた。細部までこだわったデザインが、ロゴそのものを縮小した際に潰れてしまうのだ。今後のロゴを使った展開を考えるとこの部分は無視することができず、残念ながら選考から外れる結果となった。

図1：72歳男性の作品

図2：15歳女性の作品

図3：アイルランド人の作品

図4：プロデザイナーの作品

図5：プロデザイナーの作品

図6：最終選考まで残った作品

ワーキングホリデー40年の歴史

ワーキングホリデー制度は、かつて英連邦内で、青少年が仕事に就く前に、海外に出かけて様々な文化に触れ、交流を深める一般的な慣習として広く行われていたものである。これらの域内では、ワーキング・ホリデー制度として青少年（17―30歳）に休暇を主目的とした2年間の査証（ビザ）無し渡航、滞在が認められていたが、時にはこれが安易な労働力対策として利用された経緯もある。すなわち、ワーキングホリデーとして入国し、就業を続け、長期に在留する者が増え、それが労働市場を圧迫するなどの問題もあって、何度か見直しがなされるとともに、イギリスでは、1970年代に査証（ビザ）無し渡航が原則として禁止され、英連邦域内でも労働査証等が必要になるに及んで、それまで自由に行き来できていたオーストラリア、ニュージーランド等との間で、改めてワーキングホリデー制度を行うこととし、広く世界に広がったものである。

2019年現在、この制度を持つ国は60カ国まで増えている。その中でも日本は長い歴史と多くの協定国を持つ国だ。（協定国の多さは世界第4位）

ワーキングホリデー協定の細部は、今なお変化を続けている。オーストラリアでは対カナダ・対アイルランド限定ではあるものの、ついに年齢制限が35歳まで引き上げられた。今後は、日本におけるワーキングホリデーも変わっていくことだろう。

日本と協定を結んだ国

- 1980 オーストラリア (1980)
- ニュージーランド (1985)
- カナダ (1986)
- 1990
- 韓国・フランス (1999)
- 2000 ドイツ (2000)
- イギリス (2001)
- アイルランド・デンマーク (2007)
- 台湾 (2009)
- 2010 香港 (2010)
- ノルウェー (2013)
- ポーランド・ポルトガル (2015)
- スロバキア・オーストリア (2016)
- ハンガリー・スペイン アルゼンチン・チェコ・チリ (2017)
- アイスランド (2018)
- 2020 スウェーデン (2019)

同時期の出来事

- ファッションブランド「ANNA SUI」設立 (1980)
- 「笑っていいとも」放送開始 (1982)
- インターネットの誕生 (1983)
- マイクロソフト社が Windows を販売開始 (1985)
- 元号が「平成」になる (1989)
- 東西ドイツが統一される (1990)
- 欧州連合 (EU) の発足 (1993)
- たまごっちブーム (1995)
- 長野オリンピック開催 (1998)
- 2000 年問題 (1999)
- iPod 発売開始 (2000)
- アメリカ同時多発テロ (2001)
- FIFA ワールドカップ日韓大会 (2002)
- 「千と千尋の神隠し」上映 (2003)
- 「愛・地球博」開催 (2005)
- iPhone 発売開始 (2008)
- 東北地方太平洋沖地震 (2011)
- 東京スカイツリー開業 (2012)
- 2020 夏季五輪開催地が東京に決定（2013）
- 「君の名は。」が大ヒット (2016)
- 将棋 藤井 4 段が 29 連勝 (2017)
- 東京オリンピック開催 (2020)

ワーホリを利用した著名人

小池 里奈（タレント・女優）

＜ 経歴 ＞
2004 年にデビュー。テレビ・映画などで幅広く活躍。一時芸能活動を一時休止していたが、2018 年に復帰。

2017 年に芸能活動を一時休止し、ニュージーランドに語学留学した後、オーストラリアにワーホリで滞在。トラブルもあったが「トータルで楽しかった」と海外経験を振り帰り、留学によって芸能活動への意欲がさらに高まったと明かした。

永吉 理恵（元ソフトボール日本代表）

＜ 経歴 ＞
日本代表として世界大会を多数経験。2014 年の世界女子ソフトボール選手権にも参加し、見事優勝。2015 年現役引退。

現役引退後すぐの 2016 年にオーストラリアでワーホリで滞在。その後帰国し、ソフトボールチームのコーチを務める。現在は障がい者スポーツ指導員を目指し資格を取得するなど、選手の経験を活かして、自信にできることを還元してくそうだ。

佐々 昌二（バリスタ）

＜ 経歴 ＞
オーストラリアでバリスタのスキルを磨き、2012 年に「シドニーのベスト・バリスタ」に選ばれた。

語学習得を目的にオーストラリアへワーホリした後、学生ビザに切り替えて滞在を延長。この頃からカフェでの仕事をはじめ、2014 年にカフェの激戦地シドニー・サニーヒルズに自身のお店をオープンした。